

ローマ人への手紙1章1-17節 「神の福音」

1A 使徒の召し 1-7

1B 御子の福音 1-4

2B 異邦人の信仰 5-7

2A ローマの聖徒 8-15

1B 世界に語られている福音 8

2B 訪問の願い 9-15

1C 励まし 9-12

2C 負い目 13-15

3A 恥としない福音 16-17

1B 神の力 16

2B 神の義 17

本文

はじめに

1. 使徒たちの手紙

ローマ人への手紙を始めます。まず始めにお断りしたいのですが、これからずっと手紙が続きます。新約聖書の初めの頁、次を見てみてください。そこに、目次があります。ローマからピレモンへの手紙がパウロのもの。そして、ヘブル人への手紙からユダの手紙が、いろいろな著者のもの。全体に向けて共同書簡とも言われます。そして、新約聖書の最後の最後で、黙示録であり、これからはほとんどが手紙です。だから、同じことの繰り返しと感じてしまうかもしれません。

けれども、前回お伝えしたように、決してそんなことはありません。手紙はまさに、教会に対して使徒たちが直接、教えていた内容です。使徒たちは、初めに、私たちの信仰の対象であられるイエス・キリストを書き記すべく、福音書を四人の著者を通して残しました。それから、自分たち自身の働きを、使徒の働きの中で残しています。そして今、私たちの信仰のあり方を指導するために、直接、教会の者たちには書いているのです。ですから、その一つ一つが自分たちに直接かかわるものばかりで、とても語られると思います。

ところで、その手紙の中でパウロによるものが圧倒的に多いです。13の手紙があります。教会は、ユダヤ人から始まっていますから、ユダヤ人信者もいたのですが、時を経て異邦人が多数派になってきました。異邦人のために使徒とされたパウロですから、パウロの手紙が多いのもうなず

けます。そのパウロの手紙にも、初めの 9 巻は教会に対して書いています。ローマ人への手紙から、テサロニケ人への手紙までがそうです。そしてテモテへの手紙からピレモンへの手紙は、牧者や長老に対して書いています。「牧会書簡」とも呼ばれます。

初めの、教会に対する 9 つの手紙ですが、これはとてもきれいに並べられています。初めのローマ、第一、第二コリント、そしてガラテヤは、「神の救い」に焦点を合わせて書いています。いかに人が救われるのか？について書いています。そして次の、エペソ、ピリピ、コロサイは教会について書いています。キリストの体である教会とは何か？について書いています。そして最後のテサロニケ人への手紙は、キリストの再臨が中心に書かれています。神によって救われること、キリストの体である教会、そしてキリストが天から再び戻って来られること。きれいに流れていますね。もちろん、すべての手紙に、この三つのことが書かれています。神の救いと教会、再臨を区別することはできません、それは互いに密接につながっています。けれども、神のご計画のどの側面を照らしてパウロが語っているかを考えると、そのような流れになっています。

ですから、決して退屈にならないでください。一つ一つをじっくりと見て行って、自分の信仰の建て上げ、また、教会の建て上げに本当に必要であることを知りながら、進んでいきましょう。

2. ローマ人への手紙の背景

ロマ書を全部、読まれた方はお分かりになると思いますが、実に緻密に、パウロは、神の福音について、また、信仰による義認について書いています。けれども、これは、すでに与えられているものであり、その福音の真理をじっくりと説明していったからに他なりません。一つの話題から次の話題に移るのではなく、初めに語ることで、最後に至るまで一つながりになっています。すでに与えられた救いがどのようなものなのかを順を追って説明しているのです。

そもそも、なぜパウロがこの手紙を書いたのか？なのですが、いくつかの目的があるように思われます。使徒の働きで、私たちはパウロが宣教旅行を三度しているのを見ます。第三次宣教旅行の時に、自分はローマでも証しをしなければいけないと御霊によって示されていました。けれども、まずエルサレムに行ってから、ローマに行きます。パウロは、エルサレムの教会の兄弟たちに財政的な支援をするために、自分の建て上げた各地の教会で、献金を募っていました。そしてコリントに来ましたが、この時に、コリント郊外にある港町ケンクレアに、フィベという人がいました。彼女に手紙を託して、ローマにいる聖徒たちに読んでもらうようにしたのです。

パウロが書いている手紙のほとんどが、自分の建て上げた教会でありましたが、ローマは違いました。彼が手紙を書いた時は、まだ彼は行っておらず、ぜひ行きたいのになかなか行けていない思いを手紙の中で書き記しています。ローマは、ローマ帝国の首都です。そこには、ユダヤ人も

多く住んでおり、使徒の働き 2 章の、五旬節に聖霊が降られた時に、彼らもそこにいました(使徒 2:10)。そこでペテロの説教を聞いて、悔い改め、バプテスマを受けました。その彼らがまず、福音をローマにもたらしたと考えられます。

そして、使徒の働き 18 章を見ますと、パウロがコリントに行った時、「18:1 ポントス生まれでアキラという名のユダヤ人と、彼の妻プリスキラに出会った。クラウディウス帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるように命じたので、最近イタリアから来ていたのである。」とあります。クラウディウスが、一時、ローマからユダヤ人を追放したのが紀元 49 年です。ユダヤ人がローマにいない間に、おそらく教会は異邦人中心の教会になったことでしょう。そして、その追放令が解除された後に、ユダヤ人たちは、イエスを信じる者たちも含めてローマに戻ったと考えられます。ロマ 16 章に、アキラとプリスキラが出て来るので、手紙をパウロが書いている時にはすでに戻っています。

そこで、問題が起こっていたようでした。異邦人はすでに自分たちがそのまま、恵みによって救われていると信じ、ユダヤ人の大切にしている安息日、律法などは必要ないとしていました。また、ローマにはユダヤ人追放という施策もあったばかりですから、反ユダヤ的な空気もあったかもしれません。その一方、ユダヤ人のほうは、自分たちのあり方が否定されていると感じていたのだともいます。そして、エルサレムにおける会議のことを思い出してください、律法に熱心なユダヤ人は、異邦人は、改宗することによって、つまり割礼を受けてモーセの律法を守ることで、ようやく神の国に入るのだとしていました。

パウロは、ここで、神の福音についてしっかりと真理を語り、律法の行いによってではなく信仰によって救われるのだということを明らかにします。そして、この真理の上にならば二者が受け入れ合うことを願っています。午前礼拝で取り扱ったように、1 章 16 節に「福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力」と書いているのは、そのためだと思えます。ロマ書の後半にその中身が現れてきて、14 章と 15 章において、互いに受け入れ合うことについての勧めがあります。

もう一つの目的は、パウロがイスパニア、今のスペインへの宣教を考えていたということです。これは 15 章に出てきますが、彼がイスパニアに行く計画を言及しています。かつてアジアとギリシアに宣教に行く時に、シリアのアンティオキアが拠点となりました。けれども、イスパニアに行く時は、ローマを拠点にしていきたいという思いがあったかもしれません。アンティオキアはあまりにも遠いからです。彼は、まだ福音が届いていないところに届けたいという強い願いがあったからです。

1A 使徒の召し 1-7

では、本文を読んでいきましょう。1 節から 7 節は、長いあいさつ文です。

1B 御子の福音 1-4

¹キリスト・イエスのしもべ、神の福音のために選び出され、使徒として召されたパウロから。

手紙の送り手、パウロの紹介です。「キリスト・イエスのしもべ」とありますが、「しもべ」はデューロスというギリシア語で、奴隷という意味です。全く権利のない奴隷として自分を表現しています。けれども、聖書の中で奴隷だからこそ、主人の所有となっており、だから主人の権限もある意味、自分のものになっているとも言えるのです。パウロは、徹底的に自分の権利を放棄し、キリスト・イエスの奴隷になっていたからこそ、この方の権威と力が与えられていたと言えます。

そして、「神の福音のために選び出され」と言っています。福音のために生き、働くように選ばれました。そして、「使徒として召された」と言っています。使徒とは、遣わされた者です。イエス・キリストを代表すべく、その権威を授けられて、遣わされているということです。パウロはこのことを強調する必要がありました。イエス様が三日目によみがえられた時に、この方を目撃した使徒たちとは違うからです。パウロはそこにいませんでした。そのために、パウロは真正な使徒ではないとして、彼の伝える恵みの福音を否定する者たちが数多くいたからです。今でも、「今のキリスト教はパウロ神学だ」とか、訳の分からないことを言う人たちがいますが、イエス様が十二使徒を選ばれたと同じように、パウロも使徒として選ばれました。

ところで、「選ばれた」とか「召された」という言葉はとても大切です。使徒のような、大きな働き、務めのための選びと召しもありますが、次に、異邦人たちが召される話をパウロはします。それは、救われたということです。救いも、教会も、そして奉仕の務めも神の選びと召しによって成り立っています。すべてのキリスト者が、自分が信じたことははっきりと確信しているけれども、自分が選んだというよりも、神が自分を選び、召してくださったのだということを良く知っています。自分のしたことではなく、神のなされたことだからです。

そして教会というのは、エクレシアというギリシア語ですが、集会のことです。集まるように呼びかけられて、集まってきたのです。教会についても、自分が、「ここは、きちんとした神学だから、だから選びました。」とか、「賛美スタイルが良かったから」とか、「牧師の説教が気に入った」とか、いろいろ判断基準があったのかもしれませんが。けれども、教会になおのこと残り、そこで信仰の成長の実を見ることのできる人々は、必ず、「自分の意志で来ているのではなく、神に召されて、呼ばれて、ここにいるのだ。」ということが分かっています。分かっているからこそ、自分が主体ではなく、神が主体であり、神が主人であり、自分は神に仕えているのだということが分かるのです。

²—この福音は、神がご自分の預言者たちを通して、聖書にあらかじめ約束されたもので、³ 御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、⁴ 聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。

パウロは今、「神の福音」のために選び出されたと言ったので、その福音とは何か？について説明しています。それは御子に関するものですが、使徒の働きでも何度となくパウロが主張していたように、イスラエルの先祖たちが待ち望んでいたもので、預言者たちが語っていることで、約束されていたものです。

そして、御子について、肉によれば、ということと、聖なる御霊によれば、という事に分けています。人であり神であられる御子です。肉によれば、ということで、「ダビデの子孫から生まれ」ということ。これは、ダビデに対して主なる神が、世継ぎの子があなたから出て来る、彼が永遠の国の王となることを約束されました。それで、マタイによる福音書の冒頭が「ダビデの子」となっています（新改訳は、アブラハムの子孫を先に持ってきていますが、実際はダビデの子が先です）。

そして聖なる霊によれば、神の子であるということですが、これはこの方が神ご自身であることを宣言しているに他なりません。処女から聖なる御霊によって生まれることが、すでにこの方が神の子であることを示していました。御使いがマリアに語ります。「ルカ 1:35 聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれます。」けれども、この方が聖霊によってお生まれになったことは、本当にごくわずかな人々に知られるだけで、夜の番をしていた羊飼いや、また幼子イエスを拝みに来た東方からの博士たちなど、公のかたちで現れたわけではありません。

しかし、復活は違います。間違いなく、死者の中からのよみがえりで、この方が神の子であり、肉体を取られた神ご自身であることが明らかにされたのです。トマスは、「私の主、私の神」と告白しました（ヨハ 20:28）。詩篇 2 篇に、「あなたはわたしの子。わたしは今日、あなたを生んだ。（7 節）」とありますが、これはオギャーと神の子が生まれたというのではなく、神がイエス様を死者の中からよみがえらせたということなのです（使徒 13:33）。

2B 異邦人の信仰 5-7

⁵この方によって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました。御名のために、すべての異邦人の中に信仰の従順をもたらすためです。

パウロは、すばらしいですね、使徒の務めを御子によって受けたと言っていますが、使徒の務めという前に、「恵み」の務めだと言っていることです。パウロの使命はここにありました。彼は自分の信仰の息子、テモテに対して、自分は「罪人のかしら」だと言いました。キリスト教会を迫害したからです。そしてこう言っています。「I テモ 1:16 しかし、私はあわれみを受けました。それは、キリスト・イエスがこの上ない寛容をまず私に示し、私を、ご自分を信じて永遠のいのちを得ることになる人々の先例にするためでした。」ユダヤ教テロリストであってパウロが、なぜイエス・キリストを代表する使徒に任じられたのか？キリスト・イエスがこの上ない寛容を示される方なのだということ

とを人々が知って、ご自身を信じて永遠のいのちを得るようにしておられる、ということでした。

思い出すのは、ジョン・ニュートンです。あの「驚くばかりの恵み」アメージング・グレースを作詞した人です。彼は、黒人奴隷を家畜以下に取り扱った奴隷商人でした。その時に彼が犯した罪、彼らに対して、また神に対して犯した罪を思い起こして、しかし自分自身がこの上もない寛容を、イエスに示していただいて、あの歌を書きました。恵みは罪を軽くあしらうことはしません。むしろ、こんな罪を犯したのに、神がこんなにも寛容にしてくださるところにある、別の意味の恐れを抱かせます。ジョン・ニュートンは、イギリスの奴隷制度を廃止に持ち込む国会議員、ウィリアム・ウィルバーフォースの顧問牧師となっていました。

そして、神の御名のゆえに、「すべての異邦人の中に信仰の従順をもたらす」とあります。神のご計画には、イスラエルをご自分の民とするだけでなく、異邦人にも光となる計画がありました。だから、異邦人が救われることは彼らため以上に、ご自分の名、栄誉にかかっていることです。みなさんが救われたのも、みなさんのため以上に、ご自分の栄誉があつて、それで救われたのです。それから「従順」とありますが、信仰の従順です。この方を信じ、信頼することによって、御霊が与えられ、霊が一新されて、心と思いが神に向き、この方に従うところの従順です。多くの人が、信仰と行いのどちらか？と言いますが、信じたら行いがともないです。自分の行いを求めたら、結局、肉の行いになります。罪をやめるところか、ますます罪深くなります。イエスに全幅の信頼を置くことによって、御霊によって洗い清められ、心から命令に従うことができるのです。

⁶その異邦人たちの中にあつて、あなたがたも召されてイエス・キリストのものとなりました—⁷ローマにいるすべての、神に愛され、召された聖徒たちへ。私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。

パウロは、ローマの信者たちに、自分たちだけが召されてイエス・キリストのものとなったと思つてほしくありませんでした。神が異邦人を信仰の従順に召すご計画をもつておられて、その中にあなたがたもいるのだよ、と教えています。世界にある神の福音のご計画の中に、あなたがたがいるという全体を視野に入れた見方がとても大切です。私がいよいよ、世界におけるキリスト者の話をするにはそのためです。みなさん個人個人がイエス様を知ったというだけに留まらないでください。みなさんは、神の御名のゆえに、この世界に対する異邦人をお救いになるというご計画の中で、召されたのです。

そこで、ローマにいる人々が召された、神の動機が、「神に愛され」とあります。神に選ばれ、召されたのは、もっぱら神に愛されたからというものです。自分が何かを行つて愛されたのではありません。また私たちは、選ばれたと聞くととかく、自分に何か優れたものがあるからこそ召されたと思つてしまうかもしれません。その反対です。何も良いものがないのに、いや捨てられて同然の者に、

神がこの上もない憐れみを抱かれて、拾っていただいたのです。それは、神がとてつもなく恵み深いという、その栄光を表すためなのです。

それから、「聖徒たち」へとありますね。神に聖め別たれた人々なのです。みなさんが、救われたということは、神に聖め別たれた者たちであります。恵みによって、そのことを誇りに思ってください。神のものにされた者たちです！

そして、「恵みと平安があなたがたにありますように。」と締めくくっています。これは、ギリシア人のあいさつと、ユダヤ人の挨拶を組み合わせたものです。恵み、カリスをギリシア人は挨拶に使い、シャローム、平安をユダヤ人は挨拶にします。キリストにあって一つになっていることを示しています。また、神の恵みがあってこそ、平安が与えられるという意味も含まれています。平安を得ようと頑張ったら、いつまでも平安がありません。

2A ローマの聖徒 8-15

1B 世界に語られている福音 8

⁸ まず初めに、私はあなたがたすべてについて、イエス・キリストを通して私の神に感謝します。全世界であなたがたの信仰が語り伝えられているからです。

ここでの全世界とは、当時知られていた世界です。ローマ帝国やその周辺地域のことです。今、説明しましたように、あなたがたの信じている信仰は、あなたがただけでなく、全世界に広がっているのだよ、ということです。(コロサイ 1:6 参照)

パウロは、手紙を宛てる時に、挨拶の後に、その教会のゆえに感謝の言葉を言っています。彼らのゆえに、イエス・キリストを通して神に感謝していると。パウロは、テサロニケ人への第一の手紙で、「すべてのことにおいて感謝しなさい。(5:18)」と勧めましたが、感謝を神に献げると、神の視点での世界が自分の信仰の中に広がりますね。自分が不満に思っていること、否定的に考えていたことが、実は神のご計画の中でこうなっているのだ！という気づきを与えられます。

2B 訪問の願い 9-15

1C 励まし 9-12

⁹ 私が御子の福音を伝えつつ心から仕えている神が証ししてくださることでありますが、私は絶えずあなたがたのことを思い、¹⁰ 祈るときにはいつも、神のみこころによって、今度こそついに道が開かれ、何とかしてあなたがたのところに行けるようにと願っています。

パウロが祈りの人であることが、ここでよく分かります。彼は、他の教会への手紙で、感謝を献げると共に、絶えず彼らのために祈っていることを証言しています。すぐれた奉仕者というのは、そ

のやっていること、パフォーマンスがすぐれているのではなく、だれにも見られないところで、人々のために祈っているかどうか？であります。「マタ 6:6 あなたが祈るときは、家の奥の自分の部屋に入りなさい。そして戸を閉めて、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。」パウロは、今の私たちの時代と違って、旅をしている時は、徒歩かあるいは、船旅でした。ですから、歩いている間、船に乗っている間、たくさんの時間があつたことでしょう。そこで、教会の人々のことを思い出しては、神に祈っていたのだと思います。

そしてローマの人たちについての祈りは、道が開かれて彼らのところに行くことでした。他の手紙は、自分の建て上げた教会、あるいは育てていった教会に対するものですが、ローマは、彼は一度も行ったことがなかったのです。もしかしたら、テサロニケやベレアにいた時に、さらに西に進んでアドリア海にたどり着き、そこからローマに行こうとしていたかもしれません。けれども、テサロニケからユダヤ人がおっかけてきて、船で逃げてアテネに行きました。

¹¹ 私があなたがたに会いたいと切に望むのは、御霊の賜物をいくらでも分け与えて、あなたがたを強くしたいからです。¹² というより、あなたがたの間にあつて、あなたがたと私の互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです。

パウロのへりくだった姿勢がとてもバランスが取れています。彼は、自分に与えられた御霊の賜物、教える賜物であるとか、信仰の賜物、預言の賜物もあつたでしょう、御霊の賜物を用いて、教会が強められることを願っていました。けれども、分け与えるとうことは、同時に励ましを受けることなのです。与えることによって、受けます。自分が励ますだけでなく、自分自身も励ましを受けるのです。これが、人々に分け与える喜びです。そして、私は皆さんにもこの喜びを手にしてほしいと思います。受け取るだけでなく、それを分け与え、伝えていくのです。そうすることによって、受けている人々から励ましをかえって受けることになります。

2C 負い目 13-15

¹³ 兄弟たち、知らずにいてほしくはありません。私はほかの異邦人たちの間で得たように、あなたがたの間でもいくらかの実を得ようと、何度もあなたがたのところに行く計画を立てましたが、今に至るまで妨げられてきました。

パウロはこの、「知らずにいてほしくはありません。」という言葉をよく使っていました。それは、知られていないことを語るからです。パウロがローマに行って、福音を宣べ伝え、そこで実を得ることを何度となく計画していたけれども、妨げられてきたということ。これは知られていませんでした。ローマの人たちはないがしろにされていると感じていたのでしょうか？あるいは、他の人々がパウロは、ローマには関心がないと言いふらしていたのでしょうか？しばしば、福音の奉仕者のしていることによって、その人の心を知らずに、ないがしろにしているとか早まった判断を人々がすることが

あります。どれだけ私たちが、パウロが手紙で言い伝えているように、意思伝達をする必要があることを思わされます。

¹⁴ 私は、ギリシア人にも未開の人にも、知識のある人にも知識のない人にも、負い目のある者です。¹⁵ ですから私としては、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を伝えたいのです。

パウロは、福音宣教については「負い目」を持っているということです。これは、ローマの人に対して抱いていた負い目ではありません。パウロを召されたイエスご自身に対する負い目です。「使 13:47 主が私たちに、こう命じておられるからです。『わたしはあなたを異邦人の光とし、地の果てにまで救いをもたらす者とする。』」この「あなた」はメシア、キリストのことです。キリストが異邦人の光となり、地の果てにまで救いをもたらす方となるのですから、自分たちも地の果てまで行かないといけません。その負い目、負債を返済するために、ローマにも福音を伝えたいのです。

召しというのは、「そうせざるを得ない」という使命観です。パウロは、「I コリ 9:16 私が福音を宣べ伝えても、私の誇りにはなりません。そうせずにはいられないのです。福音を宣べ伝えなければ、私はわざわざいす。」と言いました。ですから、自分が神への奉仕を成し遂げて、「やるまでのことをやったまでです。」という反応であるべきなのです。「ルカ 17:10 同じようにあなたがたも、自分に命じられたことをすべて行ったら、『私たちは取るに足りないしもべです。なすべきことをしただけです』と言いなさい。」

そしてパウロは、この福音が全ての人に遍く伝えるべきものだを知っていました、「ギリシア人にも未開の人にも」とありますが、未開の人とはギリシア語の話さない人々ということです。当時のローマ社会の全ての人々の共通言語はギリシア語でしたが、それをあまり話さない人々もいたのです。前回の学びの出で来た、マルタ島の人々がそうですね。文明化されているかそうでないか、という意味合いも含まれるでしょう。しかし、どちらに対しても負い目があるのです。そして、知識人とそうでない人にも、とあります。ユダヤ人は、ユダヤ人と異邦人という区別をつけていましたが、ローマ人は、文化的な違い、知的な違いの壁を作っていました。日本では、学歴の違いみたいな感じでしょうか。またウチとソトという壁もありますね。そして、自分と合わない文化の人とは付き合わない、というような感じですが、しかし、すべての人に届けるべき福音を私たちは信じています。

あの進化論の創始者ダーウィンは、「種の起源」という著作を出しましたが、あの本の副題は、「生存競争において有利な人種の存続することによる、種の起源」というものでした。人種差別を強力に推し進めたのがダーウィンです。類人猿が、人間の一手手前の種であるとみなしたように、人間の中にも、進化が遅れている人種と進んでいる人種を区別しました。ヨーロッパ人種は進化していて、他の人種は人間として劣っているとみなしたのです。¹

¹ <http://www.logos-ministries.org/blog/?p=9147>

南米の南にいたフエゴ島民という未開人を見たダーウィンは、その生活を見て衝撃を受け、「おそらく最も程度の低い人種だ」と評しました。しかし、宣教師たちは、「どんな人間も、単純なキリストの福音を理解できないほど低能ということはないと信じています。」と答えます。彼らは、フルゴ島民たちの、自分たちには音にしか聞こえないものを解読し、それが列記とした言語であると知り、辞書にし、彼らをイエス様に導きました。バプテスマを受け、教会も建てられました。祈りと賛美も豊かにされました。ダーウィンは、自分が間違っていたと後で発言を撤回しています。²そうです、私たちはどうしても、「この人には福音は理解されない」と自分のほうで諦めています。神があきらめておられないのに、勝手にあきらめないでください！

3A 恥としない福音 16-17

そして、16 節と 17 節が、ローマ人への手紙全体のテーマとされています。

1B 神の力 16

¹⁶ 私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。

パウロは、福音の中に生き、福音を伝えることは、恥をとまなうことを知っています。午前礼拝はここから話したのでぜひ聞いてください。けれども、彼はキリストのゆえに愚かな者、弱い者にみなされることをよしとしました。迫害も甘んじて受けました。なぜならば、ユダヤ人だけでなくギリシア人にも、この方を信頼する者には救いが与えられる力があるのです！死者をよみがえらせる神のその力が、信じる者に働くのです！「エペ 1:19-20a また、神の大能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力が、どれほど偉大なものであるかを、知ることができますように。この大能の力を神はキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上でご自分の右の座に着かせて、」

2B 神の義 17

¹⁷ 福音には神の義が啓示されていて、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。

「神の義」という、大事なキーワードが出てきました。そして「信仰」という言葉もキーワードです。ロマ書全体のテーマは、「信仰による義」とも言えます。

私たちは義とか正義という、とかく「裁き」を連想してしまいがちです。けれども、イザヤ書には、「正義」と共に「救い」を語られている主のことばが数多く出てきます。「45:8 天よ、上から滴らせよ。雲よ、義を降らせよ。地よ、開け。天地が救いを実らせるように。正義をともに芽生えさせよ。わた

² <https://churchmissionsociety.org/our-stories/charles-darwin-i-was-wrong/>

しは【主】。わたしがこれを創造した。」「46:13 わたしは、わたしの義を近づける。それは遠くはない。わたしの救いが遅れることはない。わたしはシオンに救いを、イスラエルにわたしの栄えを与える。」「51:5 わたしの義は近く、わたしの救いは現れた。わたしの腕は諸国の民をさばく。島々はわたしを待ち望み、わたしの腕に期待をかける。」どうやら、私たちの考える義とは違うようです。神が裁くといわれても、それは、ご自分の救う人々を押し潰している者どもを滅ぼすという意味での裁きです。イエス様は、ヨハネ 3 章で、「神が御子を遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。(17 節)」と言われました。そして、「16:11 さばきについては、この世を支配する者がさばかれたからです。」とも言われました。

義というのは、元々は、「真っ直ぐ」という意味です。私たちの考えるような完璧ではなく、物事があるべきところにバランスよく配置されているというようなことです。昨日、妻と話していましたが、栄養価のある良い食べ物でも食べ過ぎたら体に悪いです。逆に悪い者と言われているものでも、適度に食べたり飲んだりしたら、かえって体に良いということさえあります。曲がっていない、真っ直ぐ、ということです。だから、正しさを追求するがばかりに、人を傷つけることがあります。そこには自分の義はあっても、神の義はないのです。神を自分の横に置くかの如く、神を神としない態度ですね。イエス様は、義を追及するパリサイ派や律法学者に対して、「マタイ 23:23 律法の中ではるかに重要なもの、正義とあわれみと誠実をおろそかにしている。」と言われました。正義の中に、憐れみや誠実も含まれているのです。それもパッケージで初めて正義であります。

それでも、なぜ正義が救いとなるのか？それは、正義の持ち主が誰か？ということに関わります。正義の持主は神ご自身で、神こそが義なる方だということです。私たちの義について、ここでは問われません。これからロマ 1 章から 3 章までで学びますが、イザヤ書には、「64:6a 私たちはみな、汚れた者のようになり、その義はみな、不潔な衣のようです。」とあります。私たちの義は、不潔な衣のようなのです。これは、女性の方々にはすみません、月のものの布というのが、直訳です。私たちが正しいことをしたとしても、神の前ではたかが知れている、いや、不潔そのものです。

神こそが義であるということが、福音の中に啓示されています。示されています。そして、もう一つ、この義というのは、「賜物」なのだということです。ロマ 6 章 17 節に、「恵みと義の賜物をあふれるばかりに受けている人たち」とあります。恵みによって、神はご自分の義をプレゼントのようにして与えてくださるということです。自分の義でもないし、自分で獲得するものでもありません。

ですから、ここで大事なものは「信仰」です。「信仰に始まり信仰に進ませる」と言っています。初めに神の義が私たちに与えられる、転嫁される時は、神を信じる信仰によって与えられます。自分には全く義がないのです。けれども、それでも神がおられるから、この方の言われていることをそのまま信じ、受け入れます、というのが信仰です。そして、信仰によって進ませるというのは、信じてからも、信じ、信頼しながら生きていくということです。何か問題が起こる時は決まって、自分の頑

張りが足りないのではなく、イエスご自身への信頼からそれて行ってしまうところにあります。

そして、新約聖書では、3箇所引用されている、預言者ハバククに対して語られた主の言葉があります。「義人は信仰によって生きる」です。神ご自身、神から言われたことを、その通りだと信じて、それにしたがって動く時、神はその人を義とみなされます。

ユダが神に罪を犯していました。ハバククは主に、どうかしてください！放っておいていいのですか？と訴えます。神は、「バビロンによって、彼らを裁く」と言われました。ええっバビロン？ユダの悪さを、小学生のいらずらだとしたら、バビロンの悪さはヤクザ級です。比べ物にならない悪です。悪を、もっと大きな悪によって正しい裁きを行われるとは？ハバククは、さっぱり理解ができませんでした。しかし、彼はじっくりとこれから、主のなされることを見張るとしました。そこで主が語られたのが、この言葉だったのです。「義人は信仰によって生きる」であります。信じるのは、しんどい作業です。忍耐を働かせます。

全くそのように見えなくとも、それでもこの方を信用して、信頼するのですから。しかし、私たちに義はない。私たちに知恵がない。知識もない。だから、たとえ自分がどう思うが、感じようが、それでもこの方に信頼すると決める時に、その信仰を神は喜ばれるのは当然です。そして、義という基準が、自分が心の中で正しいと思うようなものではなく、義なる神ご自身がしている、また、行われたことを信じるのが、正しいとみなされる、ということです。